

生きる棲み処

—暮らしの変化に合わせた住まいの在り方—



01 現代の生活と家

—背景—

現代ではネットカフェや漫画喫茶などの発展により、固定のアドレスを所持しなくても生活可能である。しかしそれは「家」が本来持っていた役割が失われていくことを促進しているのではないのか。

02 江田島に住まう

—分析・調査—

広島県南西部に位置し、年間平均気温は17℃と温暖で、平均降水量は1,912mmと少雨で典型的な瀬戸内海気候に属する。島嶼特有の傾斜地が多い。敷地北側では広島湾が眺望でき、南西部にはクマノ島が構える、自然豊かな立地である。

03 巣としての家

—概念—

本来「家」とは自分にとっての住まう場所として出現し、人間が持つ社会的・承認欲求により、他者(家族・地域)と共に住まう居場所を築くものである。そのような個人と他者との押し引き、せめぎ合いのなかで安心や安らぎを享受できる住まい・空間を築くことが「家」なのではないだろうか。すなわち動物における営巣本能が具現化したモノが人間における「家」という存在であり、家とは本来最も動物的な動物であると考えらる。



04 築き上げていく家

—提案—

都会での生活に慣れた、一人の建築家が江田島という島に移住し、始めは自分自身にとっての「家」を築き、月日の経過に伴い、家族を持ち家族にとっての「家」から次第に地域に開かれた「家」を築き上げていく、というケーススタディの提案である。建築の導入による空間の縮小・増大や利用の出現による空間の拡張などは、自分自身や家族、地域と一緒に住まう空間をつくるという動物に基づく。

05 今後の可能性

—展望—

将来的に子供は巣立を離れ、巣立っていくであろう。その時に何部屋として機能していた空間はどのような変化が起きるのか。夫婦二人はどのような空間に変化させることを望むのか。夫婦二人が残りの人生を満喫するための空間になる。もしくは子供が住まっていた空間が保管されるかのように、適度な空間として残る。また最終的に二人となった夫婦はどのような空間を求め、望むのか。この先幾多の変化が建築に持ち受けている。

06 わたしたちにとっての「家」

—過渡—

「わたしたちにとっての「家」」とは、与えられた空間が人間の暮らし方を強制するような従来型の家への住まい方とは違う、人間の欲求や時と共に変化する暮らし方に寄り添い、形態や住まい方、質、量を変容させていくこと。そして唯一無二の安心感や安らぎを享受できる居場所こそがわたしたちが考える「家」である。

06-1 わたしにとっての「家」

—提案—

独身の時は自分自身にとっての「家」という、生理的欲求から自分が過ごしやすい空間を築く。



06-2 家族にとっての「家」

—提案—

家族ができ、自分だけの空間だった場所に家族が住まうための空間が出現し、空間の分化が起きる。



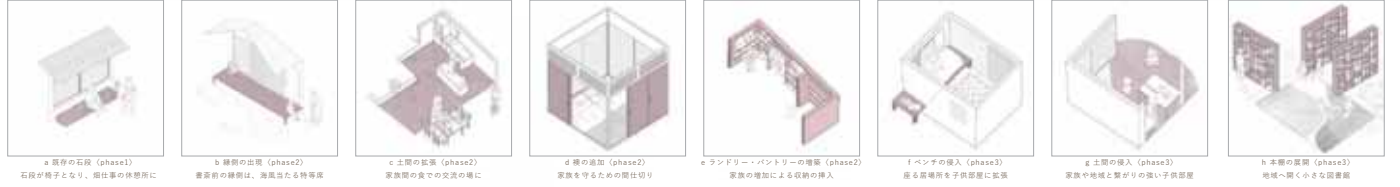
06-3 みんなにとっての「家」

—提案—

家族だけでなく、地域に開かれ、人を招き入れるための空間が出現する。



エレメントの操作



わたしの書斎は誇が見える特等席

1年目



土間から飛び出たダイニング

5年目



延びてきた縁側



島の小さな図書館



みんなの通り道土間リビング

10年目

男性 (27) 建築家

都会の暮らしに疲弊した一人の建築家が江田島に移住し、古民家を購入し「自分のための家」を築いていく。

孤独を感じ、他者と繋がりたいと思い始める。彼を始めてご近所さんとの繋がりが生まれ、「自分のための家」だったものは少しずつ物事を運入れようとする。

月日がたつ。変化する人と出会い結婚をし、子どもが生まれた。「家」に家族の空間が出現する。自分だけのあった空間が、変化する家族のために分解され、共有されていく。

子どもはすくすくと成長していく。子ども部屋が必要になる。

島暮らしも長くなってきて、収穫した野菜を売るわけだ。高橋の店舗を共有したり、生活の一部が地域に溶け出し、より地域住民との繋がりは深まってくる。空間をみんなで共有する。「みんなのための家」がここに誕生する。

